Osaka Metropolitan University

OMU Students 海外留学レポート

氏名　TR
所属　理学部 地球学科
学年　2 年

留学先　イギリス・シェフィールド大学
留学期間　2025/2/22~2025/3/16

留学レポート Study Abroad Report

私は、英語をもっと流ちょうに話すことができるようになりたい、海外の生活を体験し現地の人々と交流してみたいという二つの理由から、大学に入学した時からどこかのタイミングである程度の期間をもって留学することを考えていた。しかし、私は理系学部に所属しており、その学部の専門科目と留学を天秤にかけることは避けたかった。CAP 上限などの影響で一年間に取得できる単位数に制限があり、且つ専門科目の配当年次が 2 年次以降である科目が多く、そのうえ卒業までに取得しなければならない単位数が多く、半年や一年間留学した際にわざわざ留年しなければならないと考えたからである。これらの理由から、私は長期休暇中に参加できる短期の語学研修を選択した。

以下では、研修にあたっての事前準備から研修の最初期、１週目、２週目、３週目に自分が印象に残った出来事やその時点での心境や現地での寮生活を書き記していく。

・事前準備

私は語学研修にあたってイギリス英語についての入門書を書店で購入しそれをもとに勉強を行った。しかし、研修を終わってからどのような準備が必要だったのかを思い返すと、「英語に耳を慣らす」ことが何よりも重要であると感じた。現地の英語は、なまりがあったり多少吃音の人もいたりする。なにより、現地の人は英単語を省略しながら話すため、事前に英語に触れ続けなければ、現地の人の言っていることをすべて聞き取ることは難しい。おすすめなのが、現地の先生からも進められたものとして、YouTube で無料公開されている『BBC News』の 15 分くらいのニュース動画を視ることである。アナウンサーの人もはきはきと話してくれるし、字幕でも自動再生ではあるが英語を選択できるので、ディクテーション（英語を聞き取りながら聞き取れた単語や文章を書いていくこと）用の教材としても利用可能である。私は決してスピーキング能力が高いわけではない。いざ英語を口にしようとすると、頭が真っ白になってしまい、中学校レベルの文法でさえ出てこなくなるほどである。しかし、これから留学しようか迷っている人には、スピーキングに関する心配はしなくてよいと考える。留学前に耳を英語に慣らしておけば、現地の人が何を言っているのかなんとなくわかると思う。とにかく言っていることさえわかれば、それに従うことができるため、リスニング能力を鍛えておくことは、どの準備よりも重要だと感じる。しかしどれだけリスニングを鍛えたとしても、忘れないでほしいのが、「どんな準備をしても、現地の英語は最初に自分たちの心配をあおる」ということである。とにかく聞き取りにくい。それだけは頭の中にとどめておいてほしい。みんな同じであることを忘れなければ物怖じすることもなくなるだろう。

・留学最初期

前述したように、私は研修にあたって準備をしっかりとした方ではない。そのうえ心配性でもあったため、イギリスについたばかりの時は、不安な要素しか頭の中になかったのは事実である。

入国審査の際、空港で職員の方に中国人と勘違いされ、「上のパネルに書かれている国籍の人（日本国籍の人は対象）以外は別の窓口に行ってくれ」みたいなことを言われたときは、どうやって自分たちが

日本人であることをいうべきか戸惑ってしまった。あとから思い返せば、パスポートを見せながら「We are Japanese.」と言えば伝わったのだろうが、それすらも考えられないほど、頭の中が真っ白になってしまった。その時は幸いグループの中に英語を流ちょうに話すことのできるメンバーがいたのでその人が対応してくれたが、一人では焦ってしまってむしろ不審に思われてしまっていただろう。

加えて、寮に着いた時に受付の職員の方が説明をしてくれて、最初はチューターの方と「できるだけ簡単な感じでしゃべればいいんだよね(笑)」と言ってくれていたが、説明が始まるととても早口で「え、聞き取りやすくしゃべってくれるって話だったんじゃ…。」と唖然としてしまったことはよく覚えている。ごみ捨ての場所とか寮の仕組みとかについて丁寧に話していてくれたのだろうが、まったく聞き取ることができなくて、「これ、この先大丈夫かな…。」と大真面目に心配してしまうほどだった。

・留学 1 週目

現地の大学での初日は「Placement Test」の受験から始まった。現地の先生からは「テスト結果でクラスを分けるだけだから、そんなに緊張しないで大丈夫だよ～」と声をかけてもらい、その時の話すスピードや使っている単語を聞いて（失礼かと思うが)、「あ、リスニングテストの音源だ～」ととても安心したのを覚えている。また、テストが終わり、別の建物で入学手続きを終了させた後、建物を出てみると無料でドリンクを配布している学生集団に出会った。その人たちもとてもフレンドリーで、自分たちが日本からきて間もないことを伝えると、「ようこそシェフィールドへ！」ととてもフレンドリーに接してくれて、さらに自分に対してもいろいろ質問してくれて、こちらがうまく意味がくみ取ることができなくても「気にしないで、大丈夫だよ」と言ってくれて、「海外の人たち優しすぎ～！」と感激したことは今でも覚えている。

しかし、現地での初めての授業で、自分はまたしても「これうまくやっていけるかな～？」と心配面が勝ることになる。クラスメイトには同じ公立大からきている面々の内自分と同じくらいの CEFR レベルの人たちに加えて、中国、韓国、タイ、そしてフランスの学生がいたが、みんなの、特に日本人以外のスピーキング能力やリスニング能力が比較するまでもなく格上だったのだ。「本当にここは同じ CEFR の人たちの集まりなのか？」と目を疑うほどだった。加えて、先生はとてもハイテンションで授業もとても面白いのだが、最初の内は、それを雰囲気からしか感じ取ることができなかった。「なんかジョーク話してそうだな～」や「なんかほかのみんな笑ってるな～」というタイミングに合わせて笑顔を保つことが精いっぱいだった。

授業は基本的にスピーキングの機会を多く設けてくれる授業構成で、自分としては前述のとおり「英語でのコミュニケーション能力の向上」を目的としていたため、とてもありがたかったのに加え、クラスメイトのみんなが温かく接してくれて、自分のつたない英語でも受け入れてくれたので、クラスをもう少し簡単なものに変更することもできたが、このクラスで頑張ろうと思った。

前述したように、私は同じプログラムで来た公立大のメンバーと同じ寮の同じフラット（共用キッチン付きの個室群のようなもの）で生活することになっていたため、同じフラットのメンバーと大学周辺のスーパーを探検して安い店を共有していた。自分は自炊用の調理器具を一部持参していたが、料理は得意ではなく、最初の一週間は冷凍食品や冷凍食品でしのいでいた。

・留学 2 週目

最初の土日は、シェフィールド市内で過ごした。街中を散策したり市内の大聖堂でミサに参加して見たりととてもゆっくりしていたが、次の月曜日の授業で、ひとつ変わったことがあった。先生の言っていることやクラスメイトの話す英語が、少し聞き取りやすいものに感じたのだ。授業の雰囲気にも慣れてきたのが自分でもよく分かり、先生のジョークにも「ああそういうことね（笑)」と相槌が打てるようになってきた。その週の木曜日には、授業の一環として、シェフィールドからバスで 40 分ほどかけてリンカン大聖堂を訪れ、その歴史について現地のガイドの方から説明を受けた。説明がすべて理解できたわけではないが、授業の中で手ごたえを感じていた自分には、ガイドさんの話すストーリーのどれか一

つでも理解できたものがあると、「そういうことだったのか」とうれしくなっていた。そのあと、自分で作ってきていたサンドイッチを昼食に、大聖堂の近くのリンカン・キャッスルのベンチに座って休憩しようとすると、なかなかベンチが空いておらず、ようやく空いているベンチを見つけ座ったはいいものの、同じベンチにある老夫婦が座ろうとして、自分が慌てて席を譲ると、「一緒に座れるから大丈夫だよ」とやさしく言ってもらい、二人が静かにベンチに腰かけている間、自分は作ってきたサンドイッチを気を使いながら頬張った。その後、自分が先にベンチを離れる際、「席をシェアしてくれてありがとう」と伝えると、「ああ、そんな（お礼なんて）いいのに」と言ってくださり、「なんか日本の親切心と似てるなぁ」と強く感じ、現地の人々の温かさに直に触れることができたと強く感じた瞬間となった。

一週間以上たつと、寮での生活にも慣れてきて、少しずつ余裕が生まれてきた。そこで、持ってきていた自炊用の調理器具を使って、パスタを作った。日本でも自炊は全くと言っていいほど経験がなかったため、最初は野菜も入れずにただパスタをゆでて、バターを敷いたフライパンで炒めるだけの本当に簡単なものしか作っていなかったが、途中から野菜として玉ねぎを入れてトマトソースであえるなど、いろいろ工夫をするようになり、そうして自分の一人暮らしのスキルが向上していく過程もとても楽しかった。

このような感じで、２週目は、初めての海外生活という緊張感がいい感じにほぐれ、自分一人でできることが増えていく感覚になった。個人としては、この２週目が一番研修中で楽しかった期間といっても過言ではない。

・留学３週目

留学３週目には、２週目で感じた成長に加えてもう一つの成長が自分の中で感じられた。それは、スピーキング能力の向上である。授業がスピーキングの機会をたくさん設けてくれる授業構成だったことも相まって、クラスメイトと意見を交換する際に、頭の中に英語が浮かんでくるスピードが１週目や２週目よりも早くなったと感じられた。クラスメイトが使っている会話表現を拾って話したりなどの技術は自分にはなかったが、それでも英語に触れる時間（というよりも期間）を長くすると、自分もここまでしゃべることができるようになるのかというのがなによりも驚きだった。

また、この週は最終週ということもあり、せっかくだからということで、放課後のソーシャルアクティビティのサッカーに一日だけ参加して、本場のフットボールを体感することにした。しかし、スパイクやトレーニングシューズはもちろんなく、ウォーキング用のシューズで芝のコートを駆け回ることになった。アクティビティに参加して思ったことは「みんな、自分の想定していた 100 倍以上にサッカーうまいな」、ただ一つであった。なんとそのアクティビティには、日本でいえばもうすぐ定年レベルの年齢層の先生も参加していたが、運動不足の 20 歳（自分）よりもはるかに機敏に動けていたし、ボールの扱いもパッと見日本の JFL の選手たちとそん色ない印象を受けるほどだった。最も驚きだったのが、その先生は午後のクラスで自分にビジネスイングリッシュを教えていた先生であったことなのだが…。また、そのアクティビティ自体もかなりハードで、なんと二時間延々とミニゲームをやり続け、終盤にはみんな走ることができずにヘロヘロになるほどだった。一緒に参加していたソサイチ経験のある公立大学の友人ですら「レベル高すぎ」と言っていたので、運動不足でよくついていけたな～と、我ながら苦笑いしてしまった。それでも、アクティビティに参加していた現地学生もとてもフレンドリーで、ゲームのルール（実際のルールの改変しているところ）を優しく教えてくれたり、いいプレーには「Nice！」と言ってくれたり、自分が試合で輝いていたとは口が裂けても言えないが、とても楽しいフットボール体験となった。

寮では、最終週にも関わらず食材を買い込みすぎてしまい、その後始末に追われていた。スーパーを散策していると、「あ、これも安いし、あれも安い」と、純関西人の安いスイッチが勝手に入ってしまい、ついつい買い込んでしまっていたのだ。ここから、一人暮らしをする際には、買い込む際にはその量に最新の注意を払わなければならないという自分の特性が垣間見えたことも、留学してよかったと思うことのできる点となった。

・最後に

ここまで、自分が研修中に印象に残った出来事についてそこはかとなく書いてきたが、書き終わる前に一つだけ書いておきたいことがある。それが「観光に行くときは必ず自分で調べてから訪れ、現地でゆっくり散策する自由な時間を確保しておくこと」である。突然だが、私はサッカー観戦がとても好きで、海外サッカーやそれに関連する Youtube 動画をよく視るのだが、その中で、とあるスポーツライターが「海外のサッカー観戦をする際に合わせて観光してほしい現地のおすすめスポットはありますか？」と聞かれ、「自分で探してほしい」と即答していたことを思い出した。そして、イギリスのロンドンやシェフィールド市内を自分で周ってみて、「自分で探して訪れる」ことの重要性を認識した。また、このレポートでは詳しく触れなかったが、1 週目の日曜日に訪れたシェフィールド大聖堂で、私は 4 時からのミサに参加し、これまでの人生の中で最も新鮮でスピリチュアルな経験をすることができた。しかしそれは、ただシェフィールドの街を歩く時間として自分の中でざっくりとした予定を立て、その時間の中では、ただ自分の瞬間の感情に身を任せる時間として設定していたからこそ味わうことのできた感覚であった。シェフィールドでなくても、これから海外での生活に挑戦し、時間があまればどこかを観光してみたいという人には、ぜひ、自分でふらりと散策する時間を作ることを忘れないでほしい。研修で学べることは、英語だけではない。現地でしか感じることのできない文化や娯楽、そうしたものを、現地の人と同じ感覚で、「よし、今日はこんなことしてみるか」ときまぐれに決めることができるような、そんな予定の立て方をお勧めする。

最後に、この研修プログラムを実行するにあたってご協力いただいた大阪公立大学と University of Sheffield のスタッフの皆様、そして、同じプログラムでイギリスに渡航し、寮では同じフラットで生活し、旅行に誘ってもらったり、一緒にサッカー観戦をしてくれた 4 人の友人、現地での研修でお世話になった先生方とクラスメイトに、この場をお借りして、感謝の意を表したい。

以上